

# 成果報告書

記入日 2016年 3月14日

氏 名村上正和	渡航先国名 台湾	所属機関 中央研究院歴史語言研究所
研究テーマ： 明清期中国の賤業従事者について		
研究期間： 2015年 4月～2016年 3月		
研究成果（概要） 中央研究院、国立故宮博物院での史料調査を行い、公文書史料を中心に大きな成果があった。また台湾の明清史研究者および中国研究者との交流を深め、台北で開催された学会や研究会に参加した。		
研究成果（詳細）  <b>中央研究院、国立故宮博物院での史料調査</b> 台北の中央研究院と国立故宮博物院には明清期の公文書史料（檔案と呼ばれる）が大量に所蔵されており、明清期の社会史研究にとって極めて貴重な情報源となっている。 そこで台湾滞在中は、中央研究院歴史語言研究所・傅斯年図書館、国立故宮博物院図書文献館に所蔵されている公文書史料の調査を最優先で行った。中央研究院歴史語言研究所、国立故宮博物院図書文献館にはそれぞれ約 30 万件の公文書史料が所蔵されており、その全てを網羅的に確認するのは難しい。そのため両図書館が提供している検索システムを用いて、キーワード検索を行っていった。 調査し得た公文書史料の中でも、今後の研究にとって非常に大きな意味を持つものが二種類ある。一つは供述史料である。集めることができた供述史料の中には、中国大陸を放浪していた医師や、俳優に入れあげて妻に毒入り饅頭を食べさせようとした清朝王族、捕り手の協力者になっていた秘密宗教の元信者、祈禱によって病気が治ると宣伝し、信者を集めようとした宗教者など、社会史研究にとって極めて興味深い事件当事者の供述がある。こうした史料を収集し分析することで、今後の研究全体を深めていくための足がかりを得ることができた。 もう一つは、近代史研究所の図書館で閲覧することができた順天府檔案である。順天府檔案の中には、北京周辺での犯罪者の逮捕や治安維持活動、孤児院や冬の炊き出しといった社会福祉事業に関する史料が多数収録されている。史料の原本は北京の第一歴史檔案館に所蔵されているが、残念ながら現在は公開されていない。しかし近代史研究所の図書館ではそのマイクロフィルムを所蔵しており、閲覧することができた。これは非常に大きな成果であった。		

また公文書史料の調査以外にも、中央研究院の近代史研究所、文哲研究所、民族学研究所、人文社会科学研究中心の各図書館に頻繁に通い、研究調査を行った。特に日本では所蔵されていない大部の史料集を利用できたことは、大きな収穫であった。また19世紀末から20世紀前半にかけて出版された雑誌や新聞、欧米の宣教師や外交官の中国見聞録の調査もあわせて行った。近代史研究所の図書館にはこれら史料が開架で並べられており、非常に効率的な調査を行うことができた。特に近代の雑誌や新聞史料を調べることで、清代社会の見方を以前よりは相対化できるようになったと思う。

史料調査という点で特筆すべきは、中央研究院内で利用できた各種のデータベースである。近年、中国研究では『中国基本古籍庫』（先秦から民国までの基本文献1万種、全文17億字を収録）や『中国方志庫』（1万種にのぼる地方志類を収録）、『中国譜牒庫』（日記、年譜などを1176種収録）といった各種の大型データベースが販売されている。いずれも高額で、購入価格は数百万円にもものぼるため日本国内で利用できないものも多い。しかし中央研究院ではこれらも取りそろえており、図書館内だけでなく院内の宿舎からも利用することができた。こうしたデータベースを日常的に利用できたのは大きな収穫であり、論文を執筆する上でも大いに役立った。

こうした研究調査の成果として、「清代北京の捕り手——番役・捕役とその社会関係について」（『史学雑誌』第124編第11号、2015）を発表することができた。本論文で議論した内容は、おおむね次の2点に整理できる。①北京の捕り手であった番役が19世紀に賤業認定され、それが一因となって応募者が減少し定員割れを起こしていた。②清朝はもともと、現場の捕り手と盗賊との結びつきを利用して、犯罪者の摘発を行う体制をとっていた。しかし19世紀に入り治安悪化が深刻な課題としてクローズアップされると、捕り手と盗賊の結びつきは、逆に治安悪化の要因として問題視されるようになっていった。総じて本論文は、賤業として認定されていた捕り手の活動を明らかにし、同時に現場における治安維持と身分制とを絡めることで、清代社会のあり方を考えようと試みたものである。なお本論文を執筆する上では台北で行った史料調査、特に公文書史料の調査とデータベースの利用が非常に大きな意味を持った。

如上の研究成果の発表と並行して、今後の研究課題に関連する史料の収集、関連文献の調査も行った。特に少量ではあるが、医療史に関する史料を収集できたことは、来年度の研究につながる成果である。現在、台湾では医療史研究が非常に活発に行われている。これは中国医学の思想や理論を研究対象とするのではなく、政府の医療政策や医師の社会的実態、患者側による医師の選別、疫病発生時の政府・民間双方の対応、近代における西洋医学の導入プロセスなど社会と医療の関係性を考察するものであり、国際学会の開催や論文集の刊行など大きな成果を挙げている。台湾滞在中にその成果を学んでいく中で、清朝政府が宗教的医療者（巫医と呼ばれる）を数多く摘発していたこと、女性の宗教的医療者による治療活動が活発であったことに改めて気づき、医療史、さらには女性史という角度から社会像を再検討する必要性も感じるようになった。特に19世紀以降、清朝政府が宗教的医療者の摘発に力を注ぐようになったことを踏まえると、医療の問題は政治史、社会史とも深く関わる研究テーマであると考えられる。来年度以降は、台湾滞在中に得られた知見や収集できた史料を生かしてこの点を掘り下げ、医療という観点から社会史研究を進めていきたい。

## 研究者との交流

中央研究院ならびに台湾で活躍している研究者との交流を通して、研究ネットワークの拡充に努めた。これもまた研究成果の一つである。

受け入れていただいた歴史語言研究所の邱仲麟氏と交流を深めることができただけでなく、清代思想史を専門とする王凡森氏と、近年の研究動向について議論する貴重な機会もあった。同じく歴史語言研究所の祝平一氏、文哲所の廖肇亨氏など多くの研究者の方々と交流する機会を持てたこと、また同世代の研究者と知り合う機会も多く得られたことは、研究を進めていく上での刺激となった。

さらには、台湾大学哲学系教授の佐藤将之氏とも交流する機会を得られた。佐藤氏は中国思想史の研究者であり、専門分野は異なるものの、ご自宅に招いていただいて中国語で論文を発表するときの注意点や、国際的な研究ネットワークの構築の仕方、台湾の学者が置かれている環境など様々な事柄について教えていただいたことは、非常に有意義な経験であった。こうした方々との交流は今後の共同研究にもつながるものであり、大きな収穫であったといえる。

## 学会への参加

中央研究院ではしばしば、大型の学会が開催されている。その中でも今年は、AAS (Association for Asian Studies) の国際学会が中央研究院で開催された。

会議の報告は英語で行われたものの、参加者の多くが台湾、大陸、日本の研究者であったため、発表会場の外では中国語が用いられる場面も多かった。AAS に初めて参加でき、プレゼンテーションや質疑応答のやり方を観察できたことは非常に有意義であった。

また今年度は、明清研究国際学術研討会、医学的物質文化史国際学術研討会も中央研究院で開催された。こちらは中国語を公用語とする国際学会であり、研究報告の水準も非常に高く、啓発される内容のものも多かった。学会を通して知り合った同世代の研究者との交流は今でも続いている。

参加した学会の中でも、特に医療史研究の国際学会である医学的物質文化史国際学術研討会は参加者が非常に多く、改めてこの分野の研究の盛り上がりを感じることができた。台湾では医療社会史の研究が極めて活発であり、日本でも近代史研究では衛生や医療という観点から、重要な研究成果が相次いで公開されている。それに対して日本の明清史研究では、中国医学研究の蓄積は相当にあるものの、医療や衛生という観点からの社会史研究はまだまだ開拓の余地を残している。加えて近年では、日本語で発表した論文が読まれなくなりつつもある。学会への参加を通して、これからは医療という観点から社会史研究を進め、それを中国語論文として発表する必要があると痛感した。

## 留学中の生活・研究でのトピックス

### ① 中央研究院での生活

中央研究院は台北郊外に位置し、院内には緑があふれている。夕方には犬を連れて散歩している地元の方も多く、非常に落ち着いたのどかな日々を送ることができた。中央研究院の各図書館には、中国語、日本語、英語の文献が非常に豊富にそろえられており、宿舎内からはデータベースを自由に使うことができる。日本でもデータベースの購入が行われているものの、台湾に比べればかなり差があると実感した。図書館は17時で閉館になるが、それ以降も宿舎でデータベースを利用した研究を行うことができ、研究環境という点では非常に快適であった。強いて難点を挙げるなら、郊外に位置しているため、研究院の周辺には食堂が少ない。院内にもレストランは設けられていたものの、工事のため一時期閉鎖されてしまい、食事場所に困ることはあった。

### ② 台北市内の見学、台南への旅行

台北市内の博物館や歴史的な建築物を見て回れたことも貴重な経験であった。特に故宮博物院の展示を繰り返し見学できたのは、非常に有意義な体験であったといえる。明清期の書画は、やはり図録で見るのとは違う迫力があり、特に特別展示されていた郎世寧の作品には圧倒された。

台南に旅行した際には、孔子廟などの文化遺産を見学した。以前に留学していた北京では、清代の建築物はあまり残っていなかったが、こうした寺廟を見て回れたのは貴重な経験になった。

最後になりましたが、このような貴重な機会を与えて下さった松下幸之助記念財団のみなさま、ならびに審査員の先生方に、心よりお礼申し上げます。今回の在外研究で得られた成果と経験を生かして今後さらに研究を進め、また教育を通して学生に伝えていきたいと考えております。本当にありがとうございました。

## 今後の社会貢献

2016年4月より、新潟大学人文学部に東洋史担当の准教授として赴任することが正式に決まった。今後は新潟大学での授業や国際交流活動、市民講座などの機会を通して、社会貢献を果たしていきたいと考えている。特に東洋史の教員として、自身の研究成果やこれまでの中国・台湾での経験を学生に還元できる機会を得られたことは非常に嬉しく、やりがいを感じている。日本では台湾に親近感を持っている人が多いけれども、それでは台湾の歴史や社会についての知識を持っているかといえば、必ずしもそうではない。微力ではあるが、少しでも学生に台湾や東アジアに関心を持ってもらえるよう、今年度の在外研究で得られた経験を生かしていきたい。また研究面でも、今年度の成果をさらに発展させられるよう努めていきたい。そして将来的には清代北京の日常生活を主題とした一般向けの著書を発表し、少しでも中国に興味を持ってもらえればと考えている。



夕方の台北市内。通りの奥には様々な店が建ち並ぶ。



中央研究院近代史研究所図書館の前にいたリス。院内には鳥やリスも多い。



中央研究院の宿舎前から撮影。院内にはかつては西洋料理のレストランが入っていたが、2016年2月に閉鎖されてしまった。